

(別紙 2)

## 審査の結果の要旨

氏名 瀧 将之

本論文「ハイデガー哲学における真理と秘匿性」は、ハイデガーの主著『存在と時間』から第二の主著ともいえるべき『哲学への寄与論稿』にいたるまでの彼の「真理」概念を辿りながら、そのうちにみられる「秘匿性」の契機の位置づけがどのように変化していったかを追跡した論考である。『存在と時間』で古代ギリシア語のアレーテイアを手掛かりに真理を「非秘匿性(Unverborgenheit)」として解釈したハイデガーは、その後の存在論の深まりの中で、むしろ「秘匿性」の契機を真理のうちにより強く見るようになったというのが論者の主たるテーゼである。

第 1 章では、『存在と時間』における真理をめぐるハイデガーの思想の概要が辿られ、自己自身の死という「実存の不可能性という可能性」に直面する現存在の在り方のうちに、「実存の真理」が求められたことが明らかにされる。

第 2 章「存在者的な真理と存在論的な真理、その根底にひそむ現存在の超越——形而上学期の真理論」では、いわゆる形而上学期において真理の問題が、現存在の超越の運動を見つめつつ、存在者的な真理と存在論的な真理との区別に基づいて論じられていたことが確認される。しかし他方この時期には、存在者に対し存在そのものはポジティブには経験されえないことも次第に明らかとなり、「非秘匿性としての真理」における秘匿性の契機が重視されるようになったと論者は主張する。

第 3 章「「存在の真理」へと向かう真理論——講演『芸術作品の根源』」では、作品という存在者の中に「真理を打ち立てる」とする『芸術作品の根源』におけるユニークな真理論のうちに、論者は「作られて存在している」作品という存在者のうちで「存在」そのものがどこまでも抜け落ちていく事態を見て取る。

第 4 章「存在の真理——『哲学への寄与論稿』における真理論」では、形而上学期の現存在の超越の運動に基づく「超越論哲学」の構想が、その後もはや維持されえなくなったことがまず確認され、『哲学への寄与論稿』では、「存在者が与えられることのうちで存在そのものはどこまでも秘匿されたままにとどまる」という、存在のパラドクシカルな現れ方が「存在の真理」として思索されたと論者は論ずる。しかも論者によれば、存在は自らを秘匿し無化するというこの「存在の真理」は、その核心に否定性を抱え込んでいる点で、死という「実存の不可能性の可能性」を自らのうちに抱え込んだ現存在と密接に関わる。現存在が「現の秘匿性」を引き受けることによって、自らを秘匿する「存在」に呼応するところに秘匿性を重視したハイデガー真理論の展開した姿があるとされるのである。

本論文には、論文の構成や議論の展開の点で不十分な点がいくつか見受けられ、口頭試問でそれらが指摘され、質疑がなされた。しかし、『哲学への寄与論稿』における「存在の真理」の問題に、現存在の死の問題が密接に関係していることを明らかにするなど、先行研究においてもハイデガー自身においても明確にはなっていなかった点を掘り起こしたことは十分に評価される。よって本論文は博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものとして審査委員全員が一致した。